

常 識

昔、京都に近い愛宕山に、黙想と讀經に餘念のない高僧があつた。住んでゐた小さい寺は、どの村からも遠く離れてゐた、そんな淋しい處では誰かの世話がなくては日常の生活にも不自由するばかりであつたらうが、信心深い田舎の人々が代る代るきまつて毎月米や野菜を持つて來て、この高僧の生活をささへてくれた。

この善男善女のうちに獵師が一人ゐた、この男はこの山へ獲物をあさりにも度々來た。或日のこと、この獵師がお寺へ一袋の米を持つて來た時、僧は云つた。

『一つお前に話したい事がある。この前會つてから、ここで不思議な事がある。どうして愚僧のやうなもの眼前に、こんな事が現れるのか分らない。しかし、お前の知つての通り、愚僧は年來毎日讀經黙想をして居るので、今度授かつた事は、その行ひの功德かとも思はれるが、それもたしかではない。しかし、たしかに毎晩、普賢菩薩が白象に乗つてこのお寺へお見えになる。……今夜愚僧と一緒に、ここにゐて御覽。その佛様を拜む事ができる』

『そんな尊い佛が拜めるとはどれほど有難いことか分りません。喜んで御一緒に拜みます』と獵師は答へた。

そこで獵師は寺にとどまつた。しかし僧が勤行にいそしんで居る間に、獵師はこれから實現されようと云ふ奇蹟について考へ出した。それからこんな事あり得べきかどうかについて疑ひ出した。考へるにつれて疑は増すばかりであつた。寺に小僧がゐた、——そこで獵師は小僧に折を見て聞いた。

『聖人のお話では普賢菩薩は每晚この寺へお見えになるさうだが、あなたも拜んだのですか』獵師は云つた。

『はい、もう六度、私は恭しく普賢菩薩を拜みました』小僧は答へた。獵師は小僧の言を少しも疑はなかつたが、この答によつて疑は一層増すばかりであつた。小僧は一體何を見たのであらうか、それも今に分るであらう、かう思ひ直して約束の出現の時を熱心に待つてゐた。

眞夜中少し前に、僧は普賢菩薩の見えさせ給ふ用意の時なる事を知らせた。小さいお寺の戸はあけ放たれた。僧は顔を東の方に向けて入口に跪いた。小僧はその左に跪いた、獵師は恭しく僧のうしろに席を取つた。

九月二十日の夜であつた、——淋しい、暗い、それから風の烈しい夜であつた、三人は長い間普賢菩薩の出現の時を待つてゐた。やうやくのことで東の方に、星のやうな一點の白い光が見えた、それからこの光は素早く近づいて來た——段々大きくなつて來て、山の斜面を残らず照した。やがてその光は或姿——六本の牙のある雪白の象に乗つた聖い菩薩の姿となつた。さうして光り

輝ける乗手をのせた象は直ぐお寺の前に着いた、月光の山のやうに、——不可思議にも、ものすごくも、——高く聳えてそこに立つた。

その時僧と小僧は平伏して異常の熱心をもつて普賢菩薩への讀經を始めた。ところが不意に獵師は二人の背後に立ち上り、手に弓を取つて満月の如く引きしほり、光明の普賢菩薩に向つて長い矢をひゆつと射た、すると矢は菩薩の胸に深く、羽根のところまでもつきささつた。

突然、落雷のやうな音響とともに白い光は消えて、菩薩の姿も見えなくなつた。お寺の前はただ暗い風があるだけであつた。

『情けない男だ』僧は悔恨絶望の涙とともに叫んだ。『何と云ふお前は極悪非道の人だ。お前は何をしたのだ、——何をしてくれたのだ』

しかし獵師は僧の非難を聞いても何等後悔憤怒の色を表はさなかつた。それから甚だ穩かに云つた。——

『聖人様、どうか落ちついて、私の云ふ事を聞いて下さい。あなたは年來の修業と讀經の功德によつて、普賢菩薩を拜む事ができるのであるのだと御考へになりました。それなら佛様は私やこの小僧には見えず——聖人様にだけお見えになる筈だと考へます。私は無學な獵師で、私の職業は殺生です、——ものの生命を取る事は、佛様はお嫌ひです。それでどうして普賢菩薩が拜めませう。佛様は四方八方どこにでもおいでになる、ただ凡夫は愚痴蒙昧のために拜む事ができないと聞いて居ります。聖人様は——淨い生活をして居られる高僧でいらせられるから——佛を拜めるやうな

さとりを開かれませう。しかし生計のために生物を殺すやうなものは、どうして佛様を拜む力など得られませう。それに私もこの小僧も二人とも聖人様の御覽になつたとほりのものを見ました。それで聖人様に申し上げますが、御覽になつたものは普賢菩薩ではなくてあなたをだまして——事によれば、あなたを殺さうとする何か化物に相違ありません。どうか夜の明けるまで我慢して下さい。さうしたら私の云ふ事の間違でない證據を御覽に入れませう』

日出とともに獵師と僧は、その姿の立つてゐた處を調べて、うすい血の跡を發見した。それからその跡をたどつて數百歩離れたうつろに着いた、そこで、獵師の矢に貫かれた大きな狸の死體を見た。

博學にして信心深い人であつたが僧は狸に容易にだまされてゐた。しかし獵師は無學無信心ではあつたが、強い常識を生れながらもつてゐた、この生れながらもつてゐた常識だけで直ちに危険な迷を看破し、かつそれを退治する事ができた。

(田部隆次譯)

Common Sense. (Koto.)